

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Comparative Analyses : Results : Science and Medicine 5100

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 集而 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003657

科学・知識・医学 5100

吉 田 集 而*

- | | |
|-----------------------------|------------------|
| 1. 十二支 (5101) | 5. 色・方位連関 (5105) |
| 2. 占星師 (5102) | 6. 瀉血治療法 (5106) |
| 3. 星座暦 (スバル, オリオンなど) (5103) | 7. 煙浴治療法 (5107) |
| 4. 土占い (風水) (5104) | |

この項目は、民俗知識 (Folk Knowledge) ともいうべきものであるが、その内容および分布状況から二つのタイプに類別することができる。一つは、高文明で形成された知識が伝播され、それぞれの地域で変容されていたものであり、いまひとつは、高文明からの伝播とは関係ない知識である。そして後者は、その知識があるグループによってよく保存されているものと、特定のグループを越えてより古い時代に一度はひろく分布したものが、それぞれの地域の状況によってなお残存しているものにわけられている。さらに各地で独立発生したタイプも考えておかなければならない。

1. 十二支 (5101)

12の動物と他の現象 (特に暦) が相関してとらえられている項目である。動物の種類は基本的には一定している。しかし、時に変異も認められるがそれも十二支であることにはかわりはない。

この十二支の源は中国 (漢民族) と考えてよいであろう [南方 1971: 569-571]。中国の北部では十二禽で年を数えることはあったらしいが、十二支として確立したのは中国である。これは東へは朝鮮・日本に伝えられて、西ではネパール各地にまでもたらされている。そして、ここで問題となる東南アジアでは、図のように Cambodian を南限としている。中国南部の少数民族、そして Vietnamese などは当然として、Mon や Cambodian まで伝播しているのは興味深い。それでいて、Siamese などあ

* 国立民族学博物館第2研究部

たりには伝えられていない。また、ナガ・ランドにも入っていないようである。このように、中国文明の入りやすい地域と入りにくい地域があるようである。その理由を今後明らかにしてゆくのは興味深い問題であると思われる。ただし、Easter にも十二支があるとされているが、これは誤りであると思われる。

2. 占 星 師 (5102)

占星術そのものの分布はもっとひろいと思われるが、それを専業とする者がいる場合はそれよりもっとせまくなるであろう。

占星師は中国起源ともインド起源とも考えられる。それらを区別するためには、中国、インドの占星師の特質を考慮した上で、それらの例にあたらなければならない。その点では、この分布図のみからで、その伝播の仕方を読み取るのは難しい。

とはいえ、この分布図を直接的に読み取ると、ベトナムまでは中国の影響とみてよいであろう。ビルマ北部にみられる少数民族のそれは、ビルマ経由で入った可能性が高いと思われる。またカンボジアの場合も中国というよりもインドの占星師の系列と思われる。インドネシアにみられる占星師はインドのものと考えて間違いのないであろう。今ひとつ、トラックからイースターにみられる占星師はインドや中国起源とは別のもので、ミクロネシアでとくに発達した星の認識の一部を構成するものであると考えられる。

3. 星 座 暦 (スバル, オリオンなど) (5103)

星座暦は、中国やインドの高文明の影響というよりも、オーストロネシア語族の人々に特異的な知識と考えられる。この分布での例外は、Sema Naga, Kachin, Karen, Lisu, Cambodian などであるが、これらはさきの星座暦と別系統と考えた方がよいであろう。あるいは、オーストロネシア語族の言語を話す人々の故地との関連で、それらの地域に残ったのかもしれない(図1)。

星座暦は、その点ではオーストロネシア語族に属する人々の移動にそった伝播とみてよい。ただし、実際の星座暦にはさまざまな変異があり、その変異そのものも興味深い。なお、それらの中でもっとも進んだ形の星座暦はミクロネシアにみられるものである。

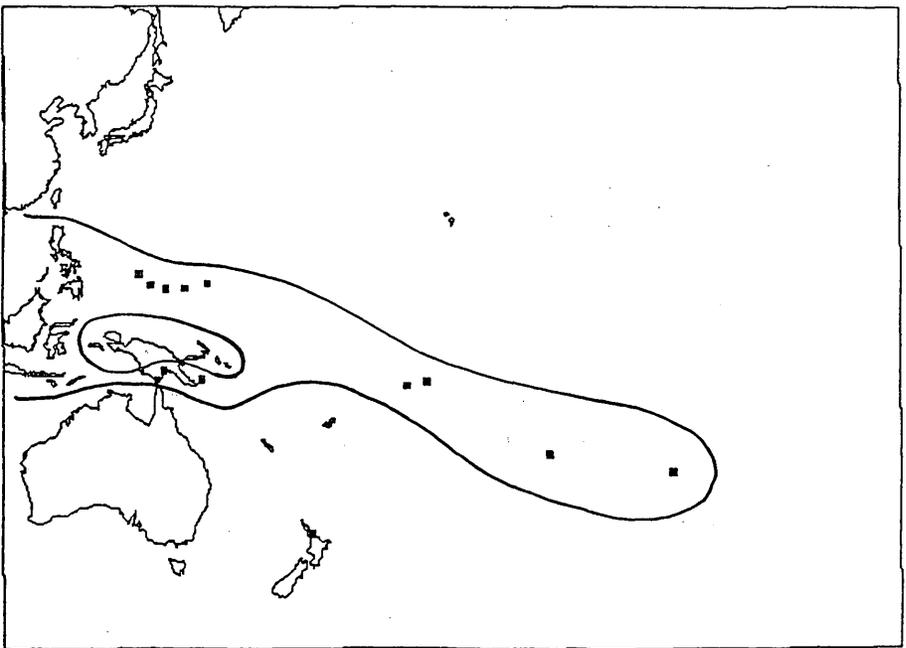
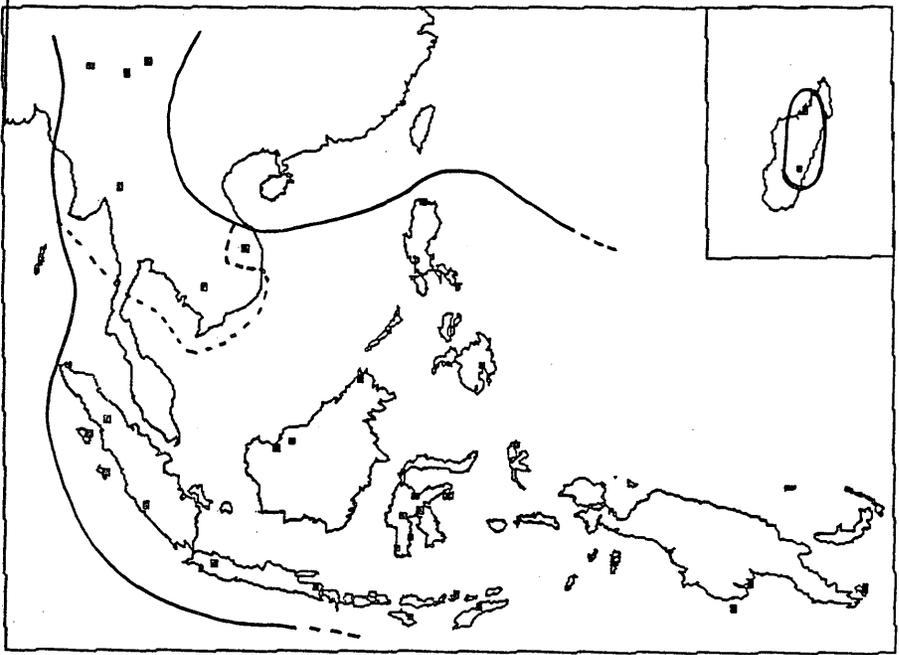


図1 星座曆

4. 土占い（風水）（5104）

土占いの起源は中国と考えるとよいであろう。そして、分布の中心は中国南部からタイ・ビルマにおよぶ地域である（図2）。ただし、例外がいくつかある。ジャワやスラウェシ南部の例は、13世紀頃に中国とこれらの地域との交易が活発になってきたことと相関していると考えられる。すなわち中国からの新しい伝播とみるわけである。しかし、マダガスカルの場合やポリネシアの Mangareva の例はこれでは説明できない。独立のものともみなければならぬであろう。

5. 色・方位連関（5105）

色などの要素が方位と関連させられた知識がある。実のところ、色だけにとどまらず植物や動物、神など、さまざまな要素と関連づけられて、一種の世界観を構成している場合がよく知られている。

この起源は、インド・中国の両方にみられる。インドのマンドラ、中国の五行説がそれぞれの代表であるが、東南アジアの場合、占星師のように両起源を同時に考えなければならぬであろう。

十二支ではカンボジアは中国からの伝播とみた。占星師ではインド要素とみた。このようにカンボジアがいつも両起源の接点となる。そして、この色・方位連関では、占星師と同様、インドの要素と考えられる。このカンボジアの場合はやや難しいが、ビルマからインドネシア、さらにスンダ列島を経て、ニューギニア南岸を経て太平洋にいたる伝播ルートは、人の移動というよりも、一種の交流が想定され、その交流によって物や知識が伝わっていった、ひとつの重要なルートと考えられる。このルートは、他の分布図においても想定されるルートであり、ニューギニア北岸ルートとはまたちがった形の伝播ルートと考えられる。ただし、ここでもマダガスカルが問題である。ここでは、これもインド起源とみておこう。

6. 瀉血治療法（5106）

血管を切ったり、ヒルなどに吸わせたりして病気を治療する方法がある。これは高文明での発明というよりは、より古い時代にひろくもちいられていた治療法であると

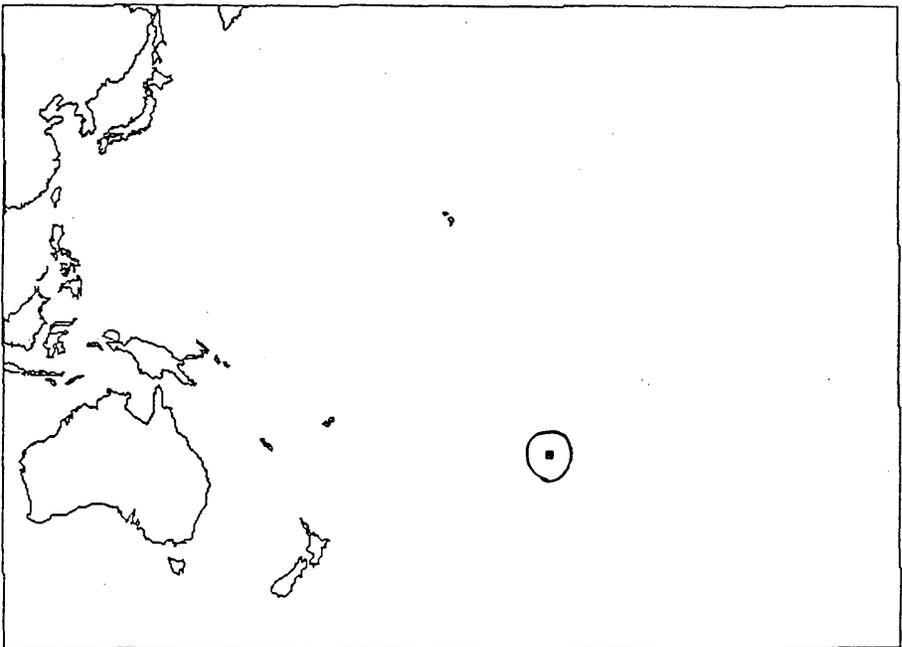
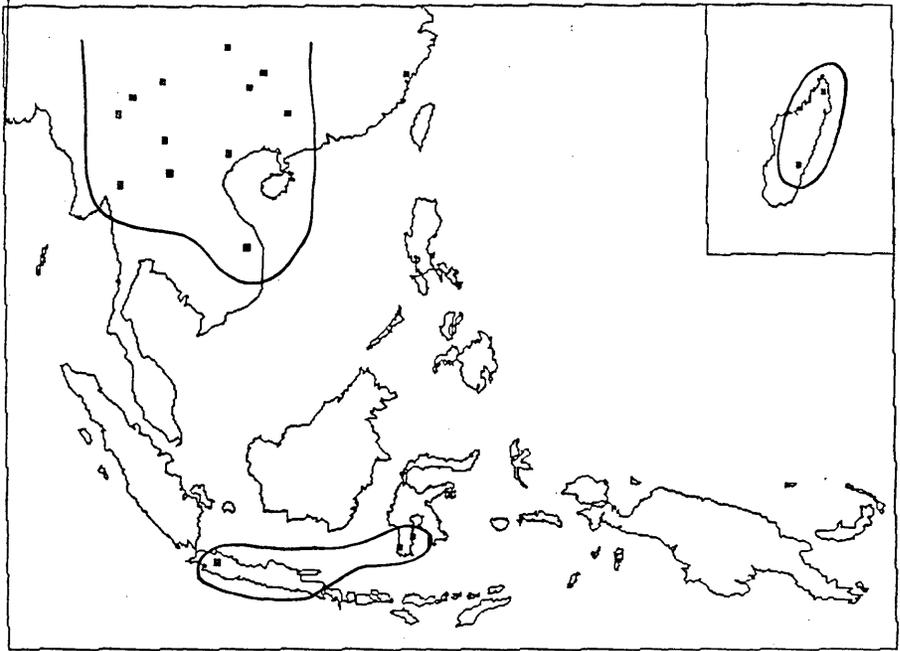


图2 土 占 い (風水)

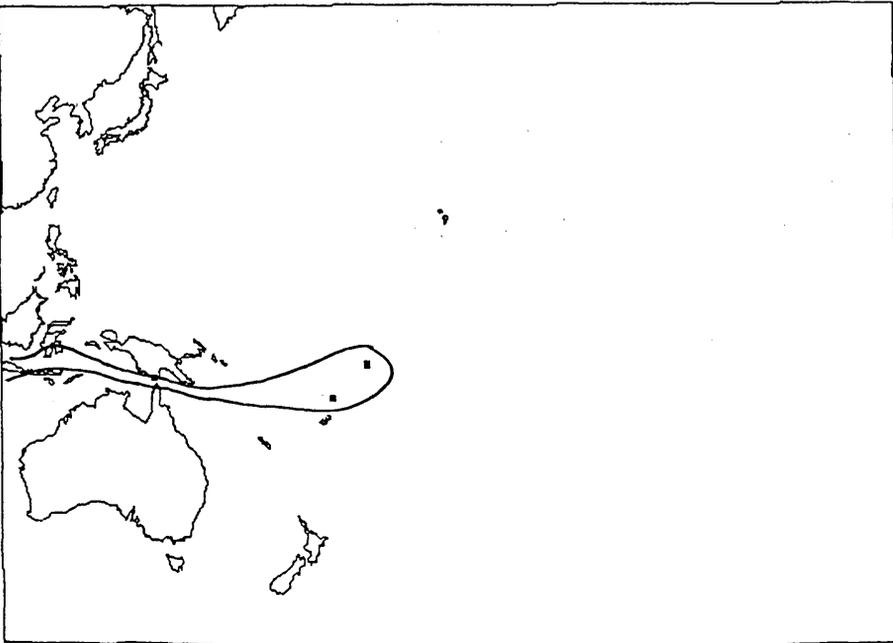
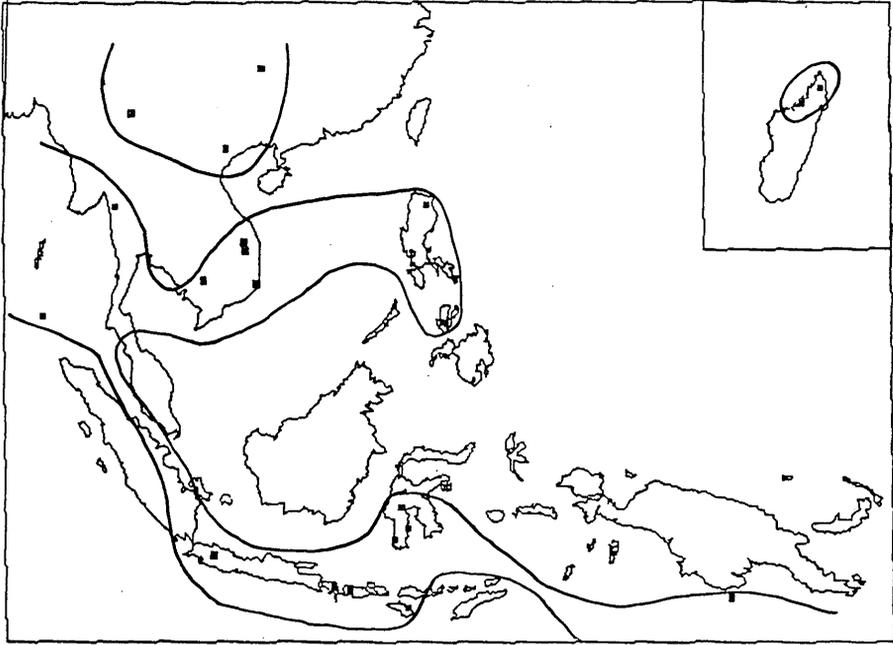


図3 色・方位連関

考えられる。そして、分布においても、Andamanese やパプア系の人々、そしてアルナチャル・ブラディッシュの Dafla, ビルマ北部の Palaung, ボルネオの Iban, セラム島の Wemale などにみられ、地理的分布だけでなく言語的にも規則性のみられない分布となっている。そして、そうした規則性よりはむしろこれらの例に共通するのは、古い文化要素を比較的好く残している人々の間に認められるということである。それゆえ、この瀉血治療法の分布は、古い時代に一度はひろく分布したのちに、多くの地域ではさまざまな理由で捨てられてしまったが、いわゆる僻地に残ったような分布をしている。そういう点では残存の典型的な分布といえよう。

7. 煙浴治療法 (5107)

煙浴治療法も瀉血治療法と同様にかなり古い治療法であり、アニミズムと関連しているものである。すなわち、煙により悪霊を追い出して病気を治す方法である。それゆえ、アニミズムの存在しているところに、残存していてもおかしくはない。実際の分布をみると、オーストラリアの一部、ニューギニア、メラネシア、ミクロネシア、スラウェシ南部、Sasak, Orang-Abung, Toba Batak, Bukidnon, そして Sema Naga にみられる。瀉血治療法とよく似た分布である。

さて、このように民俗知識をみてくると、「十二支」や「占星師」、「土占い」、「色・方位連関」などは高文明からの伝播と考えられる文化要素であり、「星座暦」はオーストロネシア語族の言語を話す人々に固有のもの、そして「瀉血治療法」、「煙浴治療法」は、より古い時代にひろく分布したものの残存と考えられる分布を示している。